



# 夜のドンキホーテ

五木寛之 河出書房新社・一九七三

# 夜のドンキホーテ

©1973

定価540円

昭和48年7月20日初版印刷／昭和48年7月30日初版発行  
著者 五木寛之 挿画 灘本唯人 発行者 中島隆之  
東京都千代田区神田小川町3丁目6番地 発行所 株式会社 河出書房新社  
電話東京(292)3711(大代表) 振替東京10802

印刷・製本 中央精版 落丁・乱丁本はお取替いたします

0093-037331-0961

目次

第一章	青年の失踪	5
第二章	怪しき乱世	31
第三章	魔都の夕月	74
第四章	タルキツシュ・ブルース	93
第五章	乱交の渦の中で	106
第六章	紅蝙蝠 <small>べにこもり</small> の反抗	140
第七章	老ライダーの暴走	169
第八章	デモに盲 <small>めし</small> いて	189
第九章	鬱 <small>ふさ</small> への旅立ち	196
作者あとがき		205



夜のドンキホーテ

冒険を追いかけて 旅ゆく者と人の呼ぶ

——セルバンテス著 “ドン・キホーテ” より——

## 第一章 青年の失踪

東山先生は、真冬にしては暖かすぎる穏やかな陽ざしの中で、ぼんやりと庭先の蟻あの行列を眺めていた。蟻たちは一匹の大きなゴキブリの死体をとりかこんで、少しずつどこかへ移動させようとがんばっているのである。

へゴキブリは冬眠しないのかな？

と、先生は考え、人家に住む連中だからその必要もないのだろうと結論をくだして納得した。最近、先生はそんなふうに何かあると、意味もない自問自答をくり返すくせがついてい



る。

へということは、つまりわしの精神が今もなお若々しいという証拠ではないのか？

例えばすぐにそんなふうに考え、いや、そうだ、それに違いない、と納得して安心するといった具合なのである。それは季節のせいもあるのかも知れない。寒さは相変らず続いているとはいえ、そろそろ二月だ。時には今日のような、ぼんやりしてしまふほど暖かな午後もある。

へ太宰府の飛び梅も、もうかなりほころびかけているだろう

この季節になると、毎年どうも余り状態がよろしくない。何となく心身が内側から火照るように昂揚して、やたらと人と喋りたくなるのである。食欲が進み、活動的になり、世間すべてに生き生きした興味が湧いてくるのだ。奇怪な話だが、早朝、ふと夜明けの光に独り目覚めて鬱勃<sup>うぼぼつ</sup>たる性的な衝動に駆られ、思わずおのれの下腹部に手を触れてみることにさえるのである。

しかし勿論、目覚めているのは神経だけであることはわかっている。七十歳を過ぎてなお朝立ちを願う心がわれながらおかしく、思わずさしのべた手を引っこめ、夜具の襟に顔を埋めて苦笑するのだ。東山正剛、七十二歳、春に狂う年でもあるまい、と自分に言いきかせな

がら。

へしかし、どうも状態が良くないな

毎年春先になると、そんな一種の躁状態が訪れてくるのを知っているから、先生はあわてない。四月を過ぎ、メーデーがやってくる頃になると、自然と落着くのが毎年の成行きなのだ。そして、梅雨が始めると今度は逆に、ひどく暗い気分になり心が閉ざされる日々がかなり長く続く。

かの睡眠三時間を豪語した活動家、ナポレオン将軍も或る学者に言わせると躁病だったという。彼の場合には、それが長く続いただけの話なのかもしれない。またバセドウ氏病の患者の場合も、一種の活動的な躁状態におちいるそうだが、東山先生の場合は、春躁夏鬱のパターンがこの十年ほどますます激しくなってきたようである。去年の春などは、先生、突然、市長選に立候補を決意して知人たちを仰天させたこともあった。数年前の夏には、菜っ切り包丁で割腹自殺を企てて新聞記事になっていた。あまりの鬱に耐えかねてのことだった。こればかりはどうしようもないことなのだ。老いが深まるにつれて、病いも深くなっていくのであろう。

へそれにしても——

と、東山先生は庭をサンダルばきでゆっくり歩きながら、昨夜から全く顔を見せない浜田昌平青年のことを改めて考えはじめた。

浜田昌平は、去年九州大学の農学部に入學した学生で、東山先生が実の孫のように愛している二十歳の下宿人であった。

この家にはもう一人、寄宿している清川明彦という学生がいるが、そっちのほうはどうも余り出来のいい若者ではない。よく若い女の声で電話がかかってくるし、それに服装もだらしがなく、最近麻雀ばかり打っているようだ。

それに引きかえ、昌平君は立派だ、と先生は思う。どんな具合に立派かは、いちいち挙げる必要もないであろう。東山先生は、まず自分がそうであるからして、読書の習慣を持つ人間が好きであった。読書人かならずしも知的とは限らぬが、少なくともそういう人間には、先生と相對していて共通の話題があった。共通の話題とはいっても、正確に言えば東山先生の方で勝手にそう思っているだけのことも知れない。実際には昌平君を相手に、東山先生が勝手に喋りまくっているだけのことである。

話題はもっぱら古今東西の書物に關してである。最近の本が取りあげられることは滅多になかった。東山先生は自他共に認める読書人であるから、そういういた關係紙誌は一応ぜんぶ

読んでも読まなくても購入している。「図書」とか「みすず」とか、または「新刊ニュース」だの「新刊展望」だのといったパンフレット類は勿論、「週刊読書人」「図書新聞」「日本読書新聞」、「波」「風景」「青春と読書」などのたぐいにいたるまで、集めて一通り見出しだけは目を通してはいるのだから相当なものと言わべきであらう。

しかし、東山先生の目下の読書は、ほとんど明治・大正、それと昭和前期の文学書類に限られているようであった。それは最近、先生が恩給を投入して古本屋から買い込んだ日本近代文学館編纂の『名著複刻全集』のせいであることは明らかである。その全集は、おそらく予約した時期に大変人気のあった流行作家あたりが、完結した頃は人気落ち、財政が苦しくなって手放したものであろうか。

典雅な装幀のそれらの書物を手に、ぼんやりと冬日の中にうずくまっている時が、このところ東山先生の最も幸福な時間であった。

文学士土井晩翠著と書かれた明治三十二年東京博文館刊の小型の詩集や、まるで掌の中にはいりそうな、これも変型判の民友社版・宮崎湖處子編『抒情詩』などの古風な書物のペーシをめぐりながら、東山先生は何ともいえぬ穏やかで平和な快感を味わうことができるのであった。

『抒情詩』中の独歩吟・序の文章など、声をはりあげて朗読すれば、おのずからなるリズムが体の中に脈うちはじめ、すこぶる爽快な気分をもたらしてくれるのだ。

《——明治の世に人となり、例へばバイロンを讀み、テニソンを讀み、シルレルを讀める者にして、其情想、衷に激すれども、これを詠出するに自在の詩體吾國に無きを憾うらむ者世間必ず其人多かるべしと信ず、余も亦また其一人なりき。

新日本の建立さるるに當りて全く缺乏したる者は詩歌なりとす。開國以來海外の新思想は潮の如く侵入し來り、吾國文明の性質著しく變化を被りしと雖いえども、遂に一詩歌現はれて此際の情想を詠じ以て、吾人の記憶に存せしめたる者なし——

へこれが本物の文章というものだ

と、東山先生は思う。

へそれにくらべて最近の小説家たちの文章は、ありや一体なんであるか

と言つても、東山先生が当世流行の小説家の作品を讀んでゐるわけではないのだから先生もかなり独断的な人物といえる。昨今の小説雑誌はすでに文学とは無縁である、というのが



先生の見解であった。かつて「小説公園」に、かのノーベル賞作家、川端康成氏が名作「千羽鶴」を連載し、「山の音」を「オール読物」に、大名作「雪国」の結びの章を「小説新潮」に執筆していた時代は、小説雑誌にも格調というものがあつた。いまはゴキ・ヒロユキとかナマシマ・ジローなどという娯楽小説家たちが、大和心を忘れたバタ臭い読物などを女子供向けに書きまくって、マスコミの波に踊っておる。かてて加えて東山先生は大のテレビ嫌いであつた。当然、先生の自宅には今もテレビなるものが存在しないのである。

へラジオはまだ良い

テレビは駄目だが、ラジオなら許せる、というのが先生の感覚であつた。週刊誌はいかんが、月刊の総合雑誌なら、まだ大目にみよう。浜田青年の感心なことは、先生の指摘するようないい加減な小説や雑誌等には、目もくれない所にあつた。しかもテレビに全く関心を示さないところなんぞ、見上げたものではないか。

へ彼は一体どこへ消えたのか？

その浜田青年が、一昨晚、昨晚、と部屋にもどらず、今日もまだ帰ってこないのである。東山先生の心配はますますつのるばかりであつた。かの愛すべき青年の身の上になにか不吉な事件、たとえば学生間のリンチとか内ゲバのような事件でも起きたのかも知れない、と考

え、先生は突如、重苦しい不安に駆られて身ぶるいした。

この辺で読者諸子のために、先生の人となりについて短く語っておく必要があるであろう。まず、東山正剛先生は、福岡の人であった。

福岡県は九州第一の大県である。

大県という言い方がおかしければ、雄県と言ってもよい。何をさして大といい、何をもちて雄と称するかは作者にもさだかではない。だが、新時代の読者諸君には、フィリング、すなわち或る種の漠たる感覚として理解していただけるものと思う。

すなわち北は波荒き玄海灘げんかいなだをのぞみ、南は、いや——、そんなことはどうでもよいのだ。ともかく福岡は九州における雄県であって、その行政の中心地は福岡市に存在する。そして全く当然のことだが、福岡市は西日本でも指折りの大都会であった。

にもかかわらず、奇妙なことに、福岡県には、どこにも福岡という国鉄の駅が見当たらないのである。

福岡市に急行列車が止まらないわけではない。特急どころか米軍の弾丸輸送車だって密かに止まることもあるのだ。しかるになぜ福岡駅は無いか。理屈を言っても仕方がない。無い



ものは無いのである。鉄道の故事来歴に関心のお有りの向きは、弘済会の売店でも、旅行案内書のたぐいを一覽せられよ。国鉄福岡駅は、なんと日本海ぞいの北陸線にある意外な事実を発見されるであらう。

率直に言つて、いや、別に率直も屈折もないのであるが、とにも角にも、福岡市に福岡駅はない。福岡のステイションは、博多駅なのである。

その博多駅で列車を降りる。駅は日本国中どこにもある拍子木の化物型のビルである。民衆駅であるから井筒屋デパートもあり、ニュー・ハカタ・ホテルもある。この福岡市の玄関に位置する高級ホテルが、ニュー・ハカタ・ホテルであつたか、それともホテル・ニュー・ハカタであつたか、作者の記憶は鮮明ではない。

どうでもいいことだが、この、ホテルが先につくか後につくかは、どうもはっきりしなくて困る。かのモスクワでは、ゴスチーニツァ・ソヴェエツスカヤだの、ゴスチーニツァ・メトロポールスカヤだのと、そのホテルの名称をうしろにくつつけて呼ぶ。ゴスチーニツァとは、勿論ロシア語でホテルの意である。なぜこのようなつまらぬことにこだわるかと言えば、作者はかつて十数年前、大阪でホテル帝国という場所に泊つて、仰天した経験があるからである。帝国ホテルならぬホテル帝国は、率直に言えばアベック専門の連込み宿であつ